

人間福祉研究第 23 号発刊にあたって

李木 明德

広島文教女子大学（現 広島文教大学）に人間福祉学科が開設されて 25 年が経ち、2025 年 4 月には第 26 期の新生を迎えることになります。全国的に福祉を標榜する大学の数は減少しています。また、福祉に関心を寄せる学生の数も同様な傾向を見せています。そうした中で紆余曲折ありながら人間福祉学科として四半世紀が過ぎたかと思うと感慨深いものがあります。そして、現場の指導者となった卒業生と出会う機会も増えてくると、人間福祉学科が福祉の領域で一定の役割を果たしていることを実感するとともに、改めてその存在の意味について考えさせられます。

人間福祉学研究第 23 号には原著論文 1 編と研究ノート 1 編、実践報告 1 編が納められています。それぞれがユニークなテーマです。井上氏による原著論文は、アメリカ合衆国の公立学校における生徒の人権に関する判例について Powell 裁判官の意見に焦点を当て、子どもの権利保障という観点から分析・検討が行われています。松田氏による研究ノートは、発達障害児に対するペアレント・プログラムの有効性について、先行研究を基に分析・検討が行われています。中嶋氏らによる実践報告は学生のキャリアに対する関心を高める取り組みについてまとめたものです。特に今年度は福祉従事者（主に本学卒業生）を招き講話を行っていただいた取り組みについて教育効果の視点から分析・検討が行われています。

3 編ともテーマは違いますが、それぞれのキーワードである人権、支援、キャリア（福祉従事者）を取り上げると、そこに人間福祉学科と何らかの共通性を連想することもできます。つまり、自らのキャリアの一つとして

福祉従事者を目指し、その学びの過程で支援と人権のあり方について考えていくことができる、このような力を持った学生を育てていくという人間福祉学科の使命が浮かび上がってきます。

このような力を持った学生を育てていくことを目指すために、人間福祉学科とともに歩む人間福祉学会では、その根幹にある資格養成について考えるシンポジウムを今年度行いました。学科では社会福祉士の資格を基本に精神保健福祉士、介護福祉士、保育士の資格取得を目指すことができます。そこで今回は自らのキャリアの中で 2 資格以上の立場を経験された卒業生を招き、資格による役割の違いや共通する専門性について整理するとともに、学科が行っている資格養成の意味について考える機会としました。詳細については人間福祉学会活動報告の中に掲載しておりますので、目を通していただけたら幸いです。

人間福祉学会は、学びの場であると共に、「文教だからこそ」の支援観やつながりを確認し、形にする場となっています。この学会を中心に、これからもさらに多くの学びやつながりを提供していくことができた则认为しています。そして、在学生にとっては、この学会が福祉の現場で働くことの意味ややりがいについて考えるきっかけとなったり、卒業生の姿から自らのキャリアを考えたりするきっかけとなるようにと願っています。また、卒業生の皆様にとっては卒業後の学びの場となるように願っています。

皆様におかれましては、ぜひ人間福祉学会に参加いただくとともに、今後ともご支援賜りますようよろしくお願いいたします。